

## アメリカとは何か

——ロスト・ジェネレーションに読む——

上 西 哲 雄  
 藤 田 大 憲  
 井 出 達 郎  
 中 野 辰 彦  
 藤 井 光  
 本 莊 忠 大

## 目 次

- I. 序文——アメリカ追求の結節点としての1920年代 (上西)
- II. 「見つかること」への恐怖——F. Scott Fitzgerald, “The Diamond As Big As the Ritz” (1922) から (藤田)
- III. 普遍と「生」の間で——William Faulkner, “Red Leaves” (1930) に読む「アメリカ」という時空 (井出)
- IV. Ernest Hemingway, “Wine of Wyoming” (1933) における「アメリカ人」の定義 (中野)
- V. 「アメリカ」あるいは条理あるアメリカのあなたに—— Hemingway, Fitzgerald, Faulkner (藤井)
- VI. 民族的少数派の描かれ方に見る1920年代のアメリカ (本莊)
- VII. 補遺——ワークショップにおける質問に対する回答と議論に対する発表者のコメント (藤田, 井出, 中野)

## I. 序文——アメリカ追求の結節点としての1920年代

上西哲雄

ヨーロッパ言語系の文化圏におけるアメリカ文化、アメリカ文学のひとつの特徴は、初

めから「アメリカとは何か」という問いを問い続けてきたことではないだろうか。それは17世紀以来、わざわざ遠い地に来て国を造るということをする中で、なぜこのようなことをこんなところであるのかという自己正当化が必要だったのではないかということが、すぐ思わされるところである。

そうした動きに加速がかかるのが、19世紀から20世紀初頭にかけてであることは理解できる。西部の併合 (による西海岸へのスペイン語文化圏の人々の参入) および大量の移民、それもそれまでアメリカ合衆国を築いてきた人々の言語文化圏とは異なった移民が1840年代 (のアイランド移民) 以来流入し、「アメリカの文化とは何か」ということが極めて流動的になったからである。

1920年代になって、極めて公的なレベルでは移民を規制する法律が次々とできる一方、南部の自警団であったクー・クラックス・クラン (KKK) が20世紀初頭になってカソリック (南欧・東欧移民)、ユダヤ、アフリカ系アメリカ人を排斥する組織として再出発し、1920年代には特に組織が急拡大することに見られるように、「アメリカ」についての社会的自意識の高まりがピークに達している。

キーワード：ロスト・ジェネレーション, フィッツジェラルド, フォークナー, ヘミングウェイ, アメリカ

その後、不況下での国際共産主義思想の浸透や、ナチズムの台頭に対する民主主義防衛といった、ユニバーサルな思いが広がって国家的自意識は薄められるが、1920年代に築かれた国家意識はある程度定着したと言えるのではないだろうか。近年のアメリカにおける宗教的右翼の台頭が根強いのは、このようにして形成された国民意識が人々の心のひだに沈み込んでいることが大きな背景としてあるように思われる。

そのような国家意識が高まりを見せるという文脈の中で見た時、ヘミングウェイ、フォークナー、フィッツジェラルドといった1920年代に登場した新しい作家達はどのような文学を作り出したのか。本稿はそうした観点から取り組んだ共同研究の成果である。

執筆した6人は、2006年3月4日(土)午後3時より6時まで藤女子大学(札幌市)を会場に日本アメリカ文学会北海道支部第115回談話会として行われた「第4回若手研究者のためのワークショップ」のメンバーである。上西がコーディネーター兼司会、藤田、井出、中野が発表者、藤井、本荘がコメントーターとして参加した。そのための準備は12月から始められ、主にEメールを通じて討議を重ねて本番に臨んだ。この間の討議は頻繁かつ極めて有機的なもので、最終的な分担は本稿の執筆担当と重なるものであるが、相互に大きな影響をし合ったと言える。そうしたことから、ワークショップ終了後に執筆者が相談した結果、今回の成果を共著としてここに著すものである。また、本稿末尾にワークショップでの質疑と発表者による回答および議論に対する発表者のコメントを「補遺」としてつけた。

## II. 「見つかること」への恐怖—F. Scott Fitzgerald, “The Diamond As Big As the Ritz” から

(藤田 大憲)

### 1. はじめに

F. Scott Fitzgeraldの小説, “The Diamond As Big As the Ritz” において、物語の主な舞台となるのが Braddock Washington を現在の当主とする Washington 家である。まず Washington 家の歴史について簡単に説明する。

モンタナ・ロッキーのど真ん中、全米で唯一測量されていない5平方マイルの土地の中にある Washington 家の現在の当主、Braddock Washington の父親 Fitz-Norman Culpepper Washington は、ヴァージニア出身で、ジョージ・ワシントンおよびメリーランド殖民の功績者ボルティモア卿の直系の子孫にあたり、南北戦争が終わったときは二十五歳で大佐の位にあった。彼は戦後、モンタナで牧場経営を計画し、奴隷を連れて西部へとやってきた。モンタナにやってきてひと月もたたない間に牧場経営は行き詰るが、ある日彼はモンタナの山の中でダイヤモンドを発見する。しかも調べてみれば、山そのものが一個の大きなダイヤモンドである。しかし、それだけ大きなダイヤモンドの存在が明るみに出れば、宝石市場・金市場ともにパニックが起こるだろうし、政府が専売公社を設立することもありうる。そう考えた Fitz-Norman Culpepper Washington は、秘密のままダイヤモンドを切り売りする。

後に Fitz-Norman は方針を変え、最大限に膨らんだ財産のうち数百万ドルだけを取り除けると、残りの金額をつぎ込んで希少な鉱物各種を大量に買占め、世界各地の銀行の警護厳重な金庫室に分散して預ける。息子の Braddock は、何種類もあった鉱物を世界で最も稀な鉱物—ラジウムに換えて、鉱山を閉

鎖する。それでもこれまで得た財産で、ワシントン家は今後何世代にも渡って贅沢この上ない暮らしを送ることができる、というのが物語の中で語られる Washington 家の歴史である。

さて、このようにして富を得て繁栄する Washington 家だが、秘密が明るみに出たらパニックが起こるのは目に見えており、Braddock は世界中の資産家ともども一文無しに落ちてしまうに違いないのだという状況から、彼らは「見つかること」を不安視し、何よりも恐れている。「見つかること」は彼らの経済的繁栄を奪うものであり、その秘密を守るために Washington 家の人々は、たとえば州の測量局を買収し、自分たちの土地を地図に載せない不正を行ったり、自ら招いた客ですら、非情にも殺害する。

しかし、Washington 家の人々は「見つかること」によって富を失うことだけを恐れていたのだろうか。本稿では、この問題を解決するために Washington 家の意味するもの、Washington 家を見つけることのできる飛行機の意味、そして「見つかる」ということが彼らにとってどのような意味を持つのかについて論じていくことで、この物語の背後にある Fitzgerald のアメリカ観を検証していきたい。

## 2. Washington 家が意味するもの—1920年代のアメリカとの共通点

ここでは、まず Washington 家が何を意味するのかを考察するために、彼らの富、奴隷制の継続について検証し、1920年代のアメリカとの共通点を考察する。

この物語の主人公、John T. Unger はヘイティーズの素朴な信仰では、ひたむきに富を崇め敬意を払うべきことを金科玉条としていて、富に対して一種の憧れを持っている。しかし、そんな彼の目を通して物語の中で語られる Washington 家の富は、金貨10億ド

ルといった表現やこれまでに得た財産で、ワシントン一家は今後何世代にも渡って贅沢この上ない暮らしができるという観念的な金持ちであるという説明ではなく、邸宅の大理石の玄関や、皿はどれもみな、まぎれもないダイヤモンドが二層合わさっているといった物質的な描写から強くうかがうことができる。また、黒人がボタンを押すと、温かい雨が降り始めるような屋敷の機械化の進んだ描写も、Washington 家の富を語るために用いられている。この Washington 家の富と繁栄の、経済的な成功が具体的な物質として豊かさを提供するという構図、特に経済的成功が機械化をもたらすという構図は、1920年代のアメリカの経済的な繁栄と共通するのではないだろうか。

また、はじめに述べたように、現在の Washington 家はダイヤモンドを切り売りして富を得ているのではなく、現在その富は、何種類もあった鉱物を、世界で最も希少な元素、ラジウムに換えている。ダイヤモンドを切り売りして得た金銭を、希少な鉱物という価値の高いものに換えるというこの行為は、まるで株式市場における投機のようなものである。Washington 家の経済的繁栄はその手法からも、ウォール街が国際的な経済の中心地となっていた1920年代アメリカの経済的繁栄と結びつけることができるのではないか。このように、物語の中で語られる Washington 家の富は、その投機的な手法、経済的繁栄が物質的・機械的に豊かさをもたらすという特徴から、1920年代のアメリカとの共通点が見られる。

次に、この物語における奴隷制の継続と白人・黒人の関係について考察してみる。

物語において、Fitz-Norman Culpppeper Washington が西部へ連れて行く24人の黒人は彼を崇拝する最も忠実な人間であり、奴隷制が廃止されたことも知らされていない。モンタナにある城は周辺の社会から隔絶された

世界であることをいいことに、Fitz-Norman 自ら起草した、南軍の Forrest 将軍が敗残兵を再編して正面から決戦を挑み、北軍を打ち破ったことになっている宣言文を、黒人達に読んで聞かせる。黒人達は南軍の勝利および奴隷制の継続について、何の疑いもなくそれを受け入れている。また、Braddock が自ら馬鹿げた理想主義に従って、奴隷に対して贅沢な暮らしをさせ、入浴を命じたものの風邪を引き何人かが死んでしまったことから、結局 Braddock は人種によっては水が害になる場合があるとの結論を導き出す。このように奴隷制の継続といった白人側にのみ都合のいい考え、そして贅沢な暮らしがある種の人種＝黒人には合わないという、黒人をいわば白人よりも下位の存在とみなす考えは、白人の側の力を不当に強調するものである。特に黒人を白人よりも下位の存在としてみなす Braddock の見解は、白人・黒人間における主従関係の維持に対する欲求を読みとることができる。このような白人による自民族の優位性の主張は、グラントの『偉大なる人種の消滅』(1916) やストダートの『有色人種の勃興』(1920) によって述べられた「白人種の優位性」に通じるものがあり、グラントやストダートの影響から1920年代のアメリカで盛んになった優生学的思想を垣間見ることができる。この物語における黒人の存在とは、白人の自民族の優位性を不当に主張するためのものであり、黒人を使役する Washington 家の人種観は、1920年代アメリカで盛んになった白人の自民族優位・優生学的思想と共通点を持っている。

ここまで見てきたように、この物語における Washington 家は、その株式市場における投機的な手法や、「金持ちである」ことが「物質的に豊かな生活を送れる」という構図、そして歴史を書き換えてまで奴隷制を継続し、白人の自民族の優位性を主張するという人種観といった特徴を持つ。南部や北部から歴史

的・空間的に隔絶された世界に存在しているにもかかわらず、Washington 家はいわば1920年代のアメリカを最も体現している存在である。また、彼らが富を守るために行う取引やご都合主義の道徳は、1920年代のアメリカの経済的な繁栄の裏の顔であるとも言える。

### 3. 飛行機と神

それでは、その彼らが恐れる「見つかること」の真の意味について考えるために、唯一発見する道具とされている飛行機の意味は何だろう。

この物語において、Washington 家の人々は「見つかること」を過剰に恐れている。「見つかること」によって、彼らは経済的繁栄を奪われてしまうと信じている。そんな彼らが最も恐れているのが飛行機の存在である。「見つかること」を避け、経済的繁栄を守るために高射砲を半ダースも持っているものの、絶えず発見されることの危険性を憂慮している。事実、物語の最後に Washington 家は飛行機によって発見され、爆撃を受け、崩壊へと進むのである。

それでは、この飛行機という存在は何を意味するのだろうか。純粋に飛行機を機械であると考えたとき、Washington 家の秘密保持の努力をも上回る機械であり、いわば機械化の象徴であると言えることができる。また同時に、不正な行為でさえ行い富を守ろうとする Washington 家を崩壊させるものという観点から考えてみると、飛行機という上空からの視点とは、不正を正す神の視点であると言えるのではないか。いわば飛行機とは、機械・テクノロジーの象徴であるとともに、神の力の象徴でもある。

上記のように、飛行機を「機械化」の象徴であり、かつ「神の力」の象徴であると考えたとき、飛行機に見つかることによって全てを失った Braddock がその神へ賄賂を贈り、時間を戻そうとした彼の行為は、彼の中で正

当化される。もちろん、この試みは失敗に終わり、彼は全てを失ってしまうが、この物語において経済的な成功は、上で述べたように具体的な物質として豊かさを提供し、機械化をもたらす。飛行機という機械化の象徴は、Washington家の豊かな暮らしを支える機械化の象徴でもある。あらゆる秘密保持の努力をも上回る圧倒的な「神の力」である飛行機は、同時に彼の豊かな暮らしを支える機械でもある。そして機械であるからこそ、彼はその財産を贈ることで支配し、自らの思うようにできると信じたのではないか。

#### 4. 結論－「見つかること」の真の意味とは

これまで見てきたように、物語の中でWashington家が1920年代のアメリカを体現する存在であること、そして飛行機が「機械化」の象徴であるだけでなく、「神の視点」を持つものだという文脈に沿って、Washington家が恐れる「見つかること」の真の意味について考察し、結論に変えたい。

はじめに述べたように、物語の中でWashington家が「見つかること」を恐れるのは、「見つかること」が彼らの富を失うことに結びつくからである。しかし、Washington家が1920年代のアメリカを最も体現する存在であり、飛行機が「神の視点」を持つものであるという文脈で「見つかること」について考えたとき、彼らが本当に恐れていたのは富を失うことだけではなく、経済的繁栄、物質的繁栄、そして白人の優位性の不当な主張という行為が、いつの日か神によって裁かれることを恐れているのではないだろうか。

また、物語の結末部においては、富の象徴であるダイヤモンドと夢、そして青春が重ね合わせて語られている。どんな人間の青春も夢だと語る主人公Johnは、同時に世界にはダイヤモンドしかないとも語る。1920年代という経済的繁栄(＝富、ダイヤモンド)を享受するアメリカの現状はいわば人生における

「青春」の状態であり、最後に残るのは幻滅のみであるという認識がここから読み取ることができる。

「見つかること」を恐れるWashington家の人々の不安は、彼らの繁栄が不正な行為によって支えられていることを神に正されることへの不安である。Washington家を1920年代のアメリカをもっとも体現する存在であると考え、「神の国の建設」という崇高な使命を持って移民してきた人々のそれまでの道徳や価値観が崩壊しつつも、繁栄を享受する1920年代の若きアメリカは、その繁栄に酔うだけではなく、神によって自らの姿を正されること、そしてその繁栄がいつの日か終わってしまうということにおびえていたのではないか。この物語の背後にあるFitzgeraldのアメリカ観とは、アメリカの繁栄に対する彼自身の潜在的な恐怖であり、FitzgeraldはWashington家の人々の不安や恐れを通して、その潜在的な恐怖を描いたのではないだろうか。

### Ⅲ. 普遍と「生」の間で－William Faulkner “Red Leaves” に読む「アメリカ」という時空間

(井出 達郎)

1930年に発表されたウィリアム・フォークナーの短編小説“Red Leaves”は、チカソー・インディアンと黒人という二つの共同体を軸とした、時間的・空間的に限定された枠組みの中で展開している物語でありながら、20世紀の「アメリカ」というより広い共同体への問いを孕んだ作品である。作品は、一方で「アメリカ」＝「世界」という普遍化された国家意識が「非アメリカ的な」共同体を飲み込んでいく運動を提示しながら、同時にその運動からどこまでも離脱していこうとする「生」そのものの持つ運動を描き出す。本発表では、まず19世紀から20世紀にかけての国



家意識の変容を確認した後、この相反する二つの運動が交錯する中で浮かび上がってくる「アメリカ」を論じたい。

## 1

アメリカの国家意識は、19世紀から20世紀にかけて、質的に大きな変容を遂げた。それ以前、19世紀末までのアメリカの国家意識は、「アメリカ的なるもの」から「非アメリカ的なるもの」を排除するという、自己閉鎖的・孤立主義的なものであった。しかし、米西戦争の勝利、キューバやフィリピンといった海外諸地域の領有、第一次世界大戦への介入といった事件によって、そうした排除や孤立という方針は、ウッドロー・ウィルソン大統領の1901年の言葉が示すように、必然的に転換を迫られることになる。And the day of our isolation is past. (Link 226)

そして、海外地域の領有者となり、加えて債務国から債権国となったアメリカは、「自分たちこそが世界の普遍的な進歩の先頭を切りつつある」という自負のもとに、自らを「世界の先導者」と位置づけ直すのである。それは、ウォレン・ハーディング大統領の1921年の演説に見るように、アメリカの信念を人類全体 (all mankind) の信念と同一視すること、すなわち、「アメリカ」=「人類」、  
「アメリカ」=「世界」という、「アメリカ」という時空間を普遍化することにほかならなかった。

In the beginning the Old World scoffed at our experiment; today our foundations of political and social belief stand unshaken, precious inheritance to ourselves, an inspiring example of freedom and civilization to all mankind. (“Harding’s”)

その結果、「アメリカ的なるもの」を自己閉鎖的に守るというそれまでの意識は、「非アメリカ的なるもの」を「アメリカ的なるもの」

に同化させなければならないという使命感へ変容していくことになる。「非アメリカ的なるもの」を排除させるのではなく、それを「アメリカ的なるもの」に同一化させること、それが20世紀の国家意識における特徴である。

この新しい国家意識は、国外ばかりではなく、国内へも向けられていく。それまで「非アメリカ的なるもの」とされていた国内の様々な民族や言語は、もはや排除の対象という位置づけではなく、「アメリカ的なるもの」へと同化されるべき「世界」あるいは「人類全体」の一部とみなされるようになったのである。それは、国内にいる移民を単一の国民的アイデンティティへ回収させようとする運動、特に移民をフォーディズムに基づく画一的な労働者へ改造させようとする運動に結晶していく。20世紀に変容した国家意識にとっては、「アメリカ」と「非アメリカ」、「内」と「外」という境界はもはやなく、世界は「アメリカ」という一つの普遍的なアイデンティティに回収されるものとしてしか存在しなくなったのである。

## 2

“Red Leaves”に描かれるチカソー・インディアンの共同体とは、このような新しい「アメリカ」という国家意識に包みこまれてしまった時空間であるといえる。それはまず、冒頭に登場するインディアンの会話によって示される。逃亡奴隷を探しながら彼等は、以前は黒人の肉を食べたものだった、という話をする。この会話からは、この共同体においては以前、「黒人とは食べるものである」という価値観が共有されていた、ということが分かる。しかし、彼らは続いて、近頃は黒人が貴重であるから、もう簡単に食べることはできないと述べた後、その理由を、黒人が白人との間で商品として取引が可能であるから、と説明する。ここで明らかになるのは、「黒人は食べるものである」というそれまでの彼

らの価値観が、「黒人は奴隷であり、商品である」という白人の価値観に屈服しているという点である。この価値観の受け容れは、表面的には白人に強要されたものではない。しかし、「白人がするようにしなければならない」という言葉が示すように、彼らの共同体が白人の価値観によって一方的に包囲され、飲み込まれつつあるのは確かである。

三代目首長となるモケタッベの姿は、この「アメリカ化」＝「普遍化」されつつあるチカソー・インディアンの共同体を象徴している。第2章において、初代ドゥームと二代目イセティベハが共同体を拡大させていく過程を中心に、チカソー族の過去の歴史が語られるが、本来そのような共同体の固有の歴史とは、集団のアイデンティティを確立する基盤として機能するものである。しかし、三代目となるモケタッベは、この共同体固有の歴史を保持し、そのアイデンティティを受け継いでいくことに、何の関心も示さない。モケタッベの関心は、ただ、イセティベハが白人文化から持ちかえった赤い靴を履くことだけであり、その結果、「その靴を履いたものが共同体の首長である」という考えが、共同体の成員にも浸透していく。つまり新首長のモケタッベは、共同体固有の時間や歴史ではなく、白人文化に適應することによって、チカソー族という集団のアイデンティティを継承していくことになるのである。この共同体固有の歴史が剥ぎ取られた時間感覚を作り出しているのは、「非アメリカ的なる」共同体を飲み込んでいく、「普遍化」された「アメリカ」という共同体にほかならない。

それはさらに、空間的な面においてもまた、モケタッベの共同体を包み込んでいる。初代ドゥームや二代目イセティベハの共同体は、西インド諸島やパリへの旅行といった大掛かりな移動に見るように、「外」と「内」という境界を明確に備えていた空間であった。そして彼らは、共同体の「内」を出て、その

「外」で女性や品物を手に入れ、再び「内」へと帰ってくるという移動を通して、自らの共同体を活性化していったのである。しかし、そこでは、たとえ白人の文化圏から黒人を連れてきても、彼らの意識が白人化されるということとはなかった。

Doom began to acquire more slaves and to cultivate some of his land, as the white people did. But he never had enough for them to do. In utter idleness the majority of them led lives transplanted whole out of African jungles, save on the occasions when, entertaining guests, Doom coursed them with dogs. (82-83)

When Doom died, Issetibbeha, his son, was nineteen. He became proprietor of the land and of the quintupled herd of blacks for which he had no use at all. (83)

上記二つの引用の説明からも分かるように、ドゥームは黒人に労働を強制することはなかったし、イセティベハは最初、彼らをどのように扱ったらよいかさえ分からなかった。すなわち、「外」の価値観が彼らの共同体に内面化されることはなかったのである。しかし、二代目イセティベハから三代目モケタッベにかけての共同体は、「白人がするようにしなければならない」という意識の下、黒人に土地を耕かせたり、強制的に子どもを作らせたりするなど、白人のプランテーションと同じ空間へ変容していく。そこにはもはや、「内」と「外」とを分かち境界はない。「アメリカ的なるもの」に同化した、ただ一つの空間があるだけである。白人文化に属する赤い靴を履きながら、肥満と無気力のため決して動こうとしないモケタッベの姿は、この「内」と「外」が区別できない空間を象徴的に表しているといえる。

## 3

このように「普遍化」されたチカソー族の共同体に加え、チカソー族によって隷属させられている黒人の共同体もまた、「非アメリカ的なるもの」を飲み込もうとする国家意識によって、同じように包み込まれている。黒人たちは、チカソー族に隷属させられながら、太鼓を使った儀式を続けている点にみるように、自分たち固有の共同体というべきものは保持し続けている。しかし、チカソー族の言い伝えを基準にしたり、「ヤオ」というチカソー族の言葉を用いて会話をしたりするなど、その価値意識や生活習慣は、チカソー族のものと同化してしまっている。彼らもまた、チカソー族と同様に、自分たちの歴史や個人の特定性を剥ぎ取られてしまっているのである。このとき、チカソー族もまたそれをアメリカの国家意識によって剥ぎ取られてしまっていることを考えれば、黒人たちの共同体を包み込んでいるのは、チカソー族であると同時に、そのチカソー族をも包み込んでいる「アメリカ」という国家意識にほかならない。

一つの包括的なアイデンティティが黒人の共同体を包んでいるという状況は、逃亡する奴隷が自分の逃走すべき場所を見出せない、という事態に見ることができる。19世紀の作品、例えば *Uncle Tom's Cabin* や *The Adventures of Huckleberry Finn* に登場する逃亡奴隷は、結果はともかく、どこに逃げたらよいのかという逃亡の目的地を明確に持っていた。しかし、“Red Leaves”における逃亡奴隷は、逃亡奴隷と呼ばれるにもかかわらず、自分がどこに逃亡すれば良いのか、どこに逃亡すれば自由になれるのか、というヴィジョンを全く持っていない。彼は、19世紀の作品の逃亡奴隷たちと違い、ある共同体から「外」に出る、という行為や考えが欠落しているのである。そのため、彼の逃亡の範囲は、不自然なほど狭いものになっている。辺りの地理に詳しくてもかかわらず、どこにも行く

当てがないという思いから、彼はもとの黒人の住居へ、すなわちチカソー族の領内へと戻ってきてしまう。それは、「アメリカ的なるもの」という一つの意識が世界を包み、「内」と「外」が区別できない空間、もはや「外」が存在しない空間に、彼が囚われていることを示している。

「内」と「外」という境界が存在しない空間構造は、逃亡奴隷自身の意識の構造にも当てはめることができる。イセティベハがまだ死んでいないということを確認した後、彼は自問自答する。

he could hear two voices, himself and himself.

“Who not dead?”

“You are dead.”

“Yao, I am dead,” he said quietly.

(93)

この「死んでいるか／死んでいないか」という二者択一の問いは、そもそも、「使えていた主人が死んだら、その召使であった奴隷も一緒に死ななければならない」というチカソー族の習慣を否定してしまえば、全く意味を成さないものである。しかし、チカソー族から逃亡している最中にも関わらず、彼はその価値意識を捨てることができない。「死んでいる」という答えを「ヤオ」というチカソー族の言葉で答えているように、彼の自意識は決して「外」に出ることができないのである。

このように、直接は描かれない白人の意識を1920年代当時の国家意識に重ねて読むとき、モケタッベと逃亡する黒人奴隷とは、支配する側と支配される側という関係では全くなく、「アメリカ」という大きな意識に捕らえられている、共通の問題を抱えた人間同士であることが分かる。白人文化の象徴である靴を履きながら決して動かないモケタッベと、動き回りながらも結局は逃亡することができない黒人奴隷は、両者ともに、共同体の「内」と「外」が消えた空間に閉じ込められているの



である。モケタッペが靴を脱がされたときに発する「アー・アー・アー」という息遣いと、死を迎える黒人奴隷が発する「アー・アー・アー」という息遣いが同じことは、この類似性を強調している。チカソー・インディアンと黒人は共に、「アメリカ的なもの」と「非アメリカ的なもの」、共同体の「内」と「外」の区別が消え去ったアメリカの国家意識によって、固有の時間性や空間性から切り離されているのである。

## 4

しかし作品は、このような国家意識が共同体を飲み込んでいく運動を単純に映し出しているだけではない。この一つの包括的なアイデンティティが飲み込んでいく以前にあるもの、すなわち、あらゆるアイデンティティに飲み込まれる前にある「生」そのものというべきものを描き出すことで、「アメリカ」という運動のダイナミズムを逆側からも映し出していく。この国家意識に対抗する「生」そのものの運動は、逃亡奴隷において示される、「彼自身 (himself)」という意識を通して描き出される。先ほど取り上げた自問自答の場面において彼は、「お前は死んでいる」とチカソー族の価値意識から答える。しかし、もし彼が完全にチカソー族の価値意識と同化していたのならば、そもそも「誰が死なないって？」という問いかけを自らにすることは不可能である。すなわち、彼が「彼自身と彼自身の二つの声」を聞くとき、片方は確かにチカソー族の共同体に属しているながらも、もう片方の声は、共同体には属していない、「彼自身」の声なのである。その意味で、そこに表出する「死んでいる」という状態に対する疑念、すなわち「生」への意志は、共同体の運動に対抗する運動にほかならない。それは、共同体が要求し課してくるアイデンティティをどこまでも離脱していく運動である。

黒人奴隷が逃亡を続けていく過程の中で、

アイデンティティを逃れていこうとする「生」の運動はより前景化されていく。逃亡中、彼は別の黒人に会いながら、二人がまるで違った世界にいるように感じ、そのままずれ違っていく。その後も、黒人たちの住居に戻りながら、住んでいる世界がもはや違うという理由で、受け容れを拒否される。こうして彼は、チカソー族から逃亡しながら、同時に黒人の共同体からも離脱していくことになる。そうした過程の中で彼は、「それもわしが死にたくないからだよ」という言葉をつぶやく。

“It's that I do not wish to die” —in a quiet tone, of slow and low amaze, as though it were something that, until the words had said themselves, he found that he had not known, or had not known the depth and extent of his desire. (99)

その言葉は、自分自身が「自分自身」に発した「お前は死んでいる」という判断を否定する物であると同時に、自分も知らなかった「自分の願いの深さと広さ」を明らかにしてくれる言葉であると説明される。そこには、いかなる共同体にも帰属することのない、文字通り「彼自身」の意識が提示されている。そしてそれは、「死にたくない」という、あらゆるアイデンティティを剥ぎ取られたあとに表出する、「生」そのものなのである。

最終的にチカソー族によって捕らえられた後も、この「生」の運動がとまることはない。殉死のためにイセティブハの墓に向かう場面、逃亡奴隷は、チカソー族に「さあ、こい」と何度も促されながら、そのたびに「水をください」と繰り返すことで、自分の死を先延ばしにしようとする。逃亡奴隷にとって、そのままチカソー族のために殉死することは、自分の存在をその共同体に譲り渡すことを意味する。しかし彼は、水を何度も飲み、ついに与えられた瓢箪から水がなくなったあとでさえ、むなしくも飲むまねをすることで、それ

を最後まで拒み続ける。その「生」への執着は、「それもおれが死にたくないからだ」という言葉を発した共同体から逃れようとする力が、最終的にチカソー族に捕らえられた後もなお、彼の中で動き続けていることを示している。

## 5

このように“Red Leaves”は、20世紀における「アメリカ」という時空間を、普遍と「生」という二つの運動を通して提示する。一方は、「アメリカ」＝「世界」という普遍化された包括的なアイデンティティが「非アメリカ的なる」共同体を飲み込まれていく運動であり、もう一方は、あらゆるアイデンティティを剥ぎ取られた「生」がその「アメリカ」から離脱していこうとする運動である。最終的に逃亡奴隷がチカソー族の共同体に取り込まれるという結末は、「生」の運動の「アメリカ」という運動に対する無力さを示しているようにも見える。そのように見れば、そのような「生」を飲み込んでいく運動こそが「アメリカ」である、という結論を引き出すことも可能だろう。しかし、もはや「アメリカ的なるもの」と「非アメリカ的なるもの」の境界が存在しない空間において、逃亡奴隷の「彼自身」の中から湧き上がってくる「生」の運動は、「アメリカ」という運動が捉えることのできない時空間を確かにつくりだしている。それは文字通り、「アメリカ」という空間から「逃亡」するものたちが向かうべき場所を示している。普遍と「生」という二つの運動，“Red Leaves”は、その二つの運動が交錯する「間」において、「アメリカとは何か」という問いに向き合っている。

## 引用文献

Faulkner, William. *These Thirteen*. London: Chatto, 1974.

Link, Arthur, ed. *The Papers of Woodrow*

*Wilson*. Vol. 12. Princeton: Princeton UP, 1972.

“Warren G. Harding’s Inaugural Address: Washington, D. C., March 4 1921.” *Christ And Country. net*. <[http://www.christandcountry.net/1/historic\\_docs/speeches/presidential\\_speeches.html](http://www.christandcountry.net/1/historic_docs/speeches/presidential_speeches.html)>

## IV. ヘミングウェイの“Wine of Wyoming”における「アメリカ人」の定義

(中野辰彦)

### 1. はじめに

アーネスト・ヘミングウェイの短編“Wine of Wyoming”からは、「アメリカ人」という集団の多義性を読み取ることができる。フランス系移民のフォンタン夫妻、息子アンドレ、国籍離脱者の語り手「私」は、それぞれに違った形でアメリカとの関係性を築いている。しかし、20世紀初頭の「多様の統一／異質の排除」といった風潮の中、「外」の要素を帯びた彼らとアメリカとの繋がり、どれも全てあいまいなものであった。

移住者に市民権を与えて巨大化してきたアメリカは、20世紀への変わり目には年に100万人もの移民を受け入れるようになっていた。しかし、その新移民たちの雑多な言語、宗教、民族性の過剰なまでの侵入、氾濫を危惧し、WASPの間ではアメリカの伝統を守ろうという考えが広まっていく。まず、後から来た者は故国のやり方を捨て、WASPの制度に順応すべきだというアングロ・コンフォームティーの考えが広まっていく。しかし、それが非アメリカ的な要素の排除を目指すネイティヴィズムへと変わっていくまでには、そう長くはかからない。禁酒法もその流れの1つであった。外来の価値観からアメリカの道徳を守るという名目で1920年に制定されたこの法律は、「高貴な実験」とさえ呼ばれていた。このように1920年代のアメリカは、WASP

としての国家意識が著しく高まりを見せた時期であった。

ヘミングウェイの実体験に基づいて書かれた“Wine of Wyoming”は、正にそのような時代の1928年を舞台としている。まだ禁酒法の敷かれていたその年の夏、6年に渡る海外生活を経た著者は、2人目の妻ポーリーンと共にワイオミング州の田舎町シェリダンを訪れる。そこで出会ったのが、フォンタン家のモデルとなっているフランス系移民の家族であった。彼らは下層労働に従事する傍ら、もぐりの酒場を経営していた。ヘミングウェイ夫妻は、彼らと酒を飲み交わしながらフランス語で話をしたという。作品では、その様子が語り手「私」の一人称で描かれている。一見、この作品は心温まる交友のスケッチのようにも映るが、深層には当時の社会環境が色濃く反映されている。本稿は、「外」の要素を帯びたフォンタン夫妻、アンドレ、語り手のアメリカとの関係性がどれもあいまいであること、また、当時の「アメリカ人」という集団が多義的であることを論じたい。

### 1. ささやかな孤立主義：フォンタン夫妻

移民の第1世代であるということもあり、自らを異国人として位置づけることしかできずにフランスの価値観に固執するフォンタン夫妻は、「同化／排除」を推し進めるアメリカに反発するような自意識を持っている。その例として「彼ら／我々」という意識の境界がある。マダム・フォンタンは語り手との会話で、「アメリカ人って、いっつもケーキを食べたがるんですもの」や「ある時、アメリカ人がやって来て、ビールにウィスキーを混ぜたんですから」と、自分とは違う集団としての「アメリカ人」を意識する。フォンタンもまた、酒に酔ったアメリカ人を「豚野郎」と呼ぶことで、自分とアメリカ人との間に線を引こうとする。また、マダム・フォンタンはアメリカの宗教観の狭さについて次のよう

に話す。

“The other day,” Madame Fontan said, “there was a little French girl here with her mother, the cousin of Fontan, and she said to me, ‘En Amérique il ne faut pas être catholique. It’s not good to be catholique. The Americans doesn’t like you to be catholique. It’s like the dry law.’ I said to her, ‘What you going to be? Heh? It’s better to be catholique if you’re catholique.’ But she said, ‘No, it isn’t any good to be catholique in America.’ But I think it’s better to be catholique if you are. Ce n’est pas bon de changer sa religion. My God, no.” (168-69)

ここで、マダム・フォンタンはアメリカへの同化を拒否しているどころか、フランス系の少女の意識にまでしっかりと根づいているカトリックを悪と見なす支配的な価値観について、ばかばかしいとさえ感じているように映る。他にも、フォンタン夫妻は故国の価値観で、アメリカには本や教会が多すぎるなどと非難する。アメリカ社会がフォンタン夫妻に「外」「彼ら」「異質」の要素を押しつける一方で、フォンタン夫妻も自身と社会との間に線を引こうとしている。

このフォンタン夫妻の自らを「外」に位置づける意識は、禁酒法の招いたアメリカ人の醜態によってさらに強化されることになる。彼らはその「高貴な実験」の反動を、身をもって体験することになった。語り手はフォンタン家を訪れたアメリカ人の飲酒による失態を聞かされる。それは、せっかく作った良質のビールやワインにわざわざウィスキーを混ぜ、とことん酔わないと満足のできない客、テーブルの上や靴の中に吐くほど具合の悪くなるまで飲まないと気の済まない客など、上品なフォンタンにさえ「豚野郎」と呼ばせるほどの墮落したアメリカ人の姿だった。適度な飲

酒を楽しみたいフォンタン夫妻にとって、彼らの過剰なまでの酒の飲み方は理解の域を超えており、迷惑以外の何ものでもない。カトリックの2人にとっては全く縁のない禁酒法だったが、それが彼らのささやかな生活を犯していた。このようにして、フォンタンは若者を家から閉め出したり、マダム・フォンタンも作品の冒頭で見られるように、酔っ払った男に酒を売ることを拒否したりと、ささやかな法律破りの生活をトラブルから守るための孤立を余儀なくされた。

これまで見てきたように、1920年代のアメリカの風潮と禁酒法の反動、そしてフォンタン夫妻自身の捨てることのできないフランスの価値観は、アメリカへの同化を阻止し、彼らをささやかな孤立へと向かわせた。しかし、その孤立の空間はいつも外部の脅威にさらされている。まず、作品冒頭の酔っ払ったアメリカ人のように、常に周りにはトラブルに繋がりがかねない要因がある。また、禁酒法が解除されない限り、政府組織は彼らが下層労働に従事した安い賃金から、いつ大金を奪っていくかわからない。夫が酒の密造で逮捕、監禁され、今までに755ドルもの罰金を払わされてきたことについて、マダム・フォンタンは「彼は誰にも悪いことはしてないのにね」と言う。確かに2人はささやかな暮らしをしたいだけの善良な人々で、本当に道徳の崩壊を招いているのは、「内」と見なされているはずのアメリカ人の方かもしれない。しかし、画一化を目指す1920年代のアメリカという共同体に属している限り、彼らに完全な孤立などありえない。一方的に自分たちを「外」と見なしてくる国家の風潮に置かれ、自らも「外」という孤立の意識を持ったフォンタン夫妻だったが、結局はそこも国家の権力の射程内である。互いに歩み寄ることのできないアメリカとフォンタン夫妻との間には、このようなあいまいな「内」と「外」の境界が交錯する空間が存在している。

## 2. アメリカ人に「なる／ならない」：アンドレ

フォンタン夫妻の息子アンドレとアメリカとの関係は両親のそれとは異なり、生成の過程にあると言える。フランス系移民の家族に属している彼だが、そのふるまいからは、そこから出ようとする、もしくは出されようとする傾向を見ることができる。ジョン・スタインベックは、*America and Americans*で移民の子孫について次のように言っている。

The new generations wanted to be Americans more than they wanted to be Poles or Germans or Hungarians or Italians or British. They wanted this and they did it. (16)

彼の言うようにアンドレの一連の行動からも、両親や故国の領域に留まるよりも、アメリカに同化したいという姿勢を読み取ることができる。つまり、アンドレは両親から言語、宗教、民族などの「異質」の要素を受け継ぎつつも、アメリカ化という「内」への運動をしている過程にある。

まず文化面での同化に関して、本と映画という2つの重要な要素が挙げられる。マダム・フォンタンが「アメリカ的」と見なす読書と、1920年代の大衆消費社会を象徴する映画鑑賞の両方を、アンドレが好んでいることは本文からも明らかである。本と映画という媒体を通して、他の国民と同じく、彼が「アメリカ的」価値観を獲得していくことは言うまでもない。また、彼のアメリカ化はこのような単なる文化への順応だけではなく、当時のアメリカで広く受け入れられていた社会ダーウィニズムや、それと切っても切り離せない関係にある、シオドア・ローズヴェルトの提唱した「奮闘の時代」の影響を強く受けているようにも思われる。例えば、彼は映画を見に行く前に語り手に次のような話をする。

“When I go to the show I crouch down like this and try to look small.” His

voice was very high and breaking. "If I give them a quarter they keep it all but if I give them only fifteen cents they let me in all right." (162)

これはただの無邪気な子供の発言だが、ここからは社会ダーウィニズムの影響を読み取れることもできる。まず、彼の家庭は貧しい非熟練労働者からなる。また、十代の彼は、父親が酒の密造で逮捕、監禁され、多額の罰金を支払われたことを知っていることだろう。階級の差を科学的に肯定する社会ダーウィニズムの影響下にあるアメリカにおいて、そのような社会的弱者としての両親の経済面での苦悩を目の当たりにしてきた彼は、若くして社会での厳しい生存競争を意識し始めていると考えることができるのではないか。年齢をごまかして少しでも安く映画を見てやろうという試みには、他者を敵に回してでも自分が得をしようという観念と繋がる部分があり、それは社会ダーウィニズムによって肯定される行為である。また、彼の読んでいた本が『砲艦に乗ったフランク』という少年向けの軍隊の本であることから、ローズヴェルトの「強くなければならない」という公的な言説の影響を見ることもできるのではないか。彼は実生活でも銃に強い興味を示しており、父親同伴ではなく、自分1人で狩猟に行きたいとしきりに主張している。ここから、社会的弱者である両親には頼らずに、1人で強く生きていかなければならないという彼の意思が読み取れるのではないか。一見したところアンドレの子供らしい荒々しさだが、社会ダーウィニズムと「奮闘の時代」という当時のアメリカに流布していた価値観と照らし合わせることで、アメリカ化として現実味を帯びてくる。

ここで、移民の第2世代という微妙な立場に置かれながらアメリカに同化していくアンドレを、果たして「アメリカ人」と呼ぶことができるかという疑問が浮上してくる。ロー

ズヴェルトは“Americanism”と題された1915年の演説で、帰化したアメリカ人について次のように言っている。

Some of the very best Americans I have ever known were naturalized Americans, Americans born abroad. [...] if he is heartily and singly loyal to this Republic, then no matter where he was born, he is just as good as American as any one else. (648-49)

先のスタインベックもそうだが、ローズヴェルトは「アメリカ人」の定義をWASPに限定していない。それどころか、移民も自分次第で「アメリカ人」になれるということを公的に宣言し、国家としての統制をはかろうとしている。2人の考えでは「アメリカ人」とは「なる」もの、つまり自意識の問題である。従ってまだフランスの家族の枠内にいるアンドレにも、「アメリカ人」としての未来の可能性はある。「私はアメリカ人ではありません」と言い張る移民1世の自意識と、「私はアメリカ人です」と言う移民3世の自意識との間には、アンドレのようなあいまいな自意識があり、アメリカ人に「なる／ならない」の選択は、彼自身の手委ねられていると言えるのではないか。

### 3. あいまいな語り手の「私」

語り手「私」の自意識は、フランス、もしくはフォンタン夫妻と、故国アメリカとの間で揺れている。言い換えると、彼は国籍離脱者としてフォンタン夫妻の共感者になる一方で、アメリカ人として彼らから距離を置こうともしている。まず始めに、自身をアメリカの「外」に置き、フランス、もしくはフォンタン夫妻の価値観からアメリカを非難する語り手がいる。その例として、彼は時に「彼ら／我々」の意識の境界をフォンタン夫妻と共有する。マダム・フォンタンからアメリカ人の飲酒による醜態について聞かされた彼は、



「連中は酔っ払うと始末におえないんだよ」や「きっと彼らは、気分が悪くならないと酔った気にならないだろう」と言い、フォンタンが彼らを「豚野郎」と呼ぶと、「まさしくそれだな、連中は——豚野郎だよ」と強く同意する。フォンタン夫妻と同じように、彼も自分とは違う集団としての「アメリカ人」を意識しているのである。また、彼がフォンタン夫妻と同じカトリックであることから、禁酒法によって腐敗した故国に批判的になったのは当然のことと言える。この他にも、彼はフォンタンの逮捕、監禁の話聞かされ、「フォンタンはいい人だよ。警察のやったことは犯罪だ」とフォンタン夫妻の側に立って発言する。このように、語り手がアメリカの「外」を共有する存在として、フォンタン夫妻と連帯したのはごく自然なことだったと言える。

しかしその一方で、フランスとアメリカの間で揺れる語り手を読み取ることも可能だ。まず、物語が終盤に差しかかると、フォンタン夫妻との距離を置こうとする彼の態度が目立ってくる。共感者だった彼に、傍観者としての要素が入って来るのである。例えば、彼はフォンタン家に長居をしようとはせず、町を去る前の晩に宴会を開いてくれると言うマダム・フォンタンに対しても、来るのか来ないのかわからないようなあいまいな返事を残し、結局は現れなかった。また、町を離れる車中、ワインが手に入らなかったことで意気消沈していたフォンタン夫妻について、妻は「あの人たちが幸せになれたらいいんだけど」と言うが、これに対して語り手は「幸せにはなれないだろうな。シュミットだって大統領にはなれないだろうし」と傍観者的に言い放つ。この短い言葉の意図は決定不可能だが、彼の中の相反する意識を読み取ることが可能なのではないか。彼はフォンタン夫妻の側に立って、彼らのささやかな生活を脅かそうとするアメリカ社会を非難している一方で、あ

まりにもフランス的価値観に固執しすぎる2人にも非難の目を向けていると読むことができる。つまり、彼は善良なフォンタン夫妻を一方的に「異質」と見なしてしまう偏狭なアメリカの風潮を嘆いているのと同時に、アメリカ人として、アメリカ社会への同化の意思のない2人の姿勢を批判しているのである。

このような彼の保守的な一面を想定することで、マダム・フォンタンにシュミットが選挙に勝つかと聞かれた時、一言「ノー」としか答えなかった彼の心境や、彼女がイタリア人やポーランド人に否定的に言及した際に、決まって狩猟や釣りへと話を逸らそうとした彼の意図を説明することができる。彼はもちろん非寛容なアメリカのシステムに反対し、善良なフォンタン夫妻に好感を抱いてはいるのだが、その一方で大量の移民の混入を危惧し、人種に対して偏狭な考えを持ち、禁酒法にも反対しきれないでいると考えることができる。「ノー」という一言はアングロサクソンとしての自身の優位を断言するものであり、話を逸らそうとする行為は、移民であるフォンタン夫妻の前で自身の人種観を表明することができず、沈黙を通すことを余儀なくされた彼の必然の選択だったと言える。この相反する感情の板ばさみから逃れるため、彼はフォンタン夫妻から距離を置くようになったと考えることができる。

このように、国籍離脱者と保守的なアメリカ人の2つの顔を持つ彼の矛盾は、フォンタン夫妻と歴史的コンテクストを通して明らかになる。彼の意識は常にアメリカとヨーロッパの間を揺れ動いている。帰りの車中、ワイオミングの自然にスペインの風景を見たのは、その二重性を象徴するものではないだろうか。彼の自意識はアメリカの「内」と「外」で板ばさみの状態、または宙ぶらりんの状態になっていると言える。

#### 4. おわりに

ヘミングウェイの“Wine of Wyoming”からは、「アメリカ人」という集団の多義性を読み取ることができる。20世紀初頭の「統一／排除」といった風潮のアメリカ社会において、移民たちの直面したナショナル・アイデンティティーの問題、世代間での相違、そして当時のアメリカが多く排出した国籍離脱者の自意識など、「外」の要素を帯びた彼らが国家とあいまいな関係を持つことを余儀なくされた過程が克明に描かれている。移民の第1世代として、フォンタン夫妻はフランス的価値観に固執し、アメリカの中で孤立を目指す、「内／外」の交錯した空間でいつも外部の脅威にさらされている。息子アンドレは、そのような両親に育てられながらもアメリカ化されている過程にあり、第2世代としてあいまいな自意識を持たされることになる。そして語り手「私」は、アメリカの「内」と「外」の間で相反する感情に悩まされている。彼らはみな「アメリカ人」と言うことができるが、「アメリカ人」でないとすることもできる。

この1920年代に築かれた「アメリカ人」という定義のあいまいさによって、「私は誰か」という問いが生じ、それが「アメリカ人とは何か」という問いへと変わっていき、そう問い続けることが現在のアメリカをアメリカたらしめているのではないだろうか。

#### 参考文献

- Hemingway, Ernest. *Winner Take Nothing*. New York: Scribner's, 1933.
- Roosevelt, Theodore. "Americanism." *Immigration and Americanization: Selected Readings*. Ed. Philip Davis. Boston: Ginn, 1920. 645-60.
- Steinbeck, John. *America and Americans*. New York: Viking, 1966.

#### V. 「アメリカ」、あるいは条理あるアメリカの彼方に－Hemingway, Fitzgerald, Faulkner

(藤井 光)

「アメリカとは何か…ロスト・ジェネレーションに読む」において取り上げられた三つの作品に共通して見られる特徴として、それぞれにおいて複数の異なるシステムあるいは共同体が描かれていることが挙げられる。アーネスト・ヘミングウェイにおいては、Fontan夫妻が保持する「フランス的」空間とそれが接触する同時代のアメリカがあり、F・スコット・フィッツジェラルドにおいては、Washington家がモンタナに秘かに築いた「王国」と、それを取り込もうとする第一次世界大戦後のアメリカとの軋轢が描かれている。またウィリアム・フォークナー作品では先住民の共同体とそれを蝕んでいく「白人的」要素、そしてそこに組み込まれた奴隷たちの世界が登場する。

いずれの作家たちも、特定の時代あるいは地理的に規定されるアメリカだけではなく、そうした定義を逃れた次元で作動する「アメリカ」を見つめているといえるだろう。この「アメリカ」とは各作品において具体的に描かれる共同体の「間」において見いだされるものである。1920年代や白人の価値観といったアメリカの姿が描かれる一方で、至るところに偏在しながらもそれ自体としてはっきりと姿を現すことはない「アメリカ」が姿を現す。それは国家の理想といった「彼方」ではなく、時代的・地理的なコンテクストにまわりつき続け、その中に不可視の力のように見いだされる「彼方」である。これら三人の作家たちを並べて考えること、それは単にひとつの「アメリカ」という概念をそれぞれのテキストにおいて見いだしていく作業であるというよりは、それぞれの作家たちの「間」を探求することであるだろう。「アメリカ」

はテキストから別のテキストへとつながれる関係の中で複雑さを増し、またそのためにいっそう切迫した問いとして出現してくるのである。

## 1

ヘミングウェイの短編“Wine of Wyoming”においてスケッチ風に提示されるのは、登場人物たちが接触する中で浮かび上がってくる「アメリカ」の姿である。語り手の「私」が出会ったフランス系移民との交流を描くこの短編からは、移民が置かれたコンテキストを越えた「アメリカ」の姿が次第に浮かび上がってくる。

中野はその報告の中で、ヘミングウェイにおいてFontan 夫妻と息子の Andre が接触する1920年代のアメリカの姿をまとめている。移民の第一世代である夫妻の前に絶えず現れるのは、酒を求めるアメリカ人と夫妻を取り囲む法制度である。この二つの側面を絶えず批判することによって、Fontan 夫妻は自らの「フランス的」すなわち「非アメリカ的」なアイデンティティを保持しようとする。これとは対照的に、中野が指摘するように、夫妻の息子である Andre は当時の文化へと積極的に参加していく。両親の同時代のアメリカへの反感をよそに映画館に通う彼の姿からは、次第に同化していく萌芽が認められる。

この二者のみを通して考えるならば、フランス的アイデンティティと、それを次第に取り囲んでいくアメリカ的アイデンティティがあり、Andre がそこに引きつけられていくという比較的シンプルな図式が成立する。しかし、この短編において語り手という「私」が存在することを考えるならば、この二元的なヴィジョンには回収されつくさないねじれが出現することになるだろう。すなわち、Fontan 夫妻の側にも Andre が接触する禁酒法時代のアメリカでもない「アメリカ」と対峙する語り手の姿がそこには現れてくるので

ある。

今は故国を脱出してフランスに住んでいるという語り手の位置は「アメリカ」からの自由や乖離を意味するものとしては描かれていない。むしろ、法制度的には当時のアメリカとの隔たりを得ており、またカソリックであり、同時代のアメリカから「外部」に脱出しているはずの語り手がそれでも対面せねばならない「アメリカ」が登場してくることになるのである。「アメリカをどう思うか？」と訊ねられた彼は“*It's my country, you see. So I like it, because it's my country*” (430) と言う。ここでは“*It's my country*”というフレーズが繰り返されることによって、彼の「アメリカ」肯定は条件付きという性格を帯びてくる。禁酒法時代のアメリカに対する彼の批判的な視線は、完全に「外部」である客観的な場から投げかけられることはない。このことは彼が「アメリカ」に対して保持するねじれた位置を示している。

語り手がFontan 夫妻との連帯感を完全には持ちえないことは、彼が自らを見いだすこのねじれた場によるといえるだろう。Fontan 同様に、酒を求めるアメリカ人たちを「豚」とフランス語で呼ぶにもかかわらず、最後には夫妻と語り手の間に隔たりが出現しているのである。ワインをめぐる最後のエピソードにおいて、語り手はFontan 夫妻を食事に訪れるといいながら疲労のためにやめ、また餞別としてできたてのワインを渡そうと奮闘するFontan の夫を最後には説得してやめさせる。アメリカ人に対する態度、カソリックの信仰、フランス語、狩りという嗜好など、さまざまな共通点を持つにも関わらず、両者は最後には決定的にすれ違う。そこに「アメリカ」の姿を認めることができるだろう。フランス的なものと禁酒法時代のアメリカ的なものとの「間」で、そのどちらにも同定できない「アメリカ」を抱えていかねばならない語り手の「私」の姿が刻印されている。

再び移動を開始する彼の視点からは、ワイオミングの光景がスペインを思い起こさせるという逆転した状況が出現している。外国の風景が自分の国の風景を思わせるという、「内部」としての意識を崩さないナショナルな視線とは逆に、ここではアメリカの風景が外国の風景を喚起するというねじれた状況が出現している。「内」と「外」の関係はここでは反転されられ、「アメリカ」を規定するような地理的な境界線を引くことは不可能になっている。“Wine of Wyoming”において最終的に浮かび上がってくるのは、特定の場所や時間軸において固定されることのない「アメリカ」と向き合いながら、自らの居場所を確保できない「私」の姿である。

## 2

ヘミングウェイにおいて、あたかも大気中に広がるように不特定の場に存在し、語り手に絶え間ない探求を強いる「アメリカ」の姿は、フィッツジェラルドの“The Diamond as Big as the Ritz”においてより具体的な表現を獲得している。フィッツジェラルドにおいては、作品の主な舞台となるモンタナの「王国」と、そこを目指す「外部」からの侵入者との摩擦と最終的な衝突から「アメリカ」が浮かび上がるといういいだろう。短編「泳ぐ人」において、「アメリカ」を国土でも国民でもなく、「積極的に前進してやまぬ逞しい心情」(238)と語るフィッツジェラルドのヴィジョンは、ここでは死と破壊に直進する暗転した姿を見せている。

主人公である John T. Unger の移動がこの物語を貫く原理である。南部の Hades から東部の名門校、そしてモンタナへという彼の移動は、常に「富」をその原動力として前進してやまない。彼を含めて、「外部」から Washington 家の王国を目指す者たちはその富を求めるといふ欲望に動かされて境界線を越えていく。侵入を試みて捕らえられた者た

ちが体現するのは、彼らを突き動かしていく欲望である。その中に移民二世が登場することは偶然ではないだろう。前進する運動を典型的に示す存在として、移民は「アメリカ」の担い手なのである。

一方で、Washington 家は単にその「外部」から自らを隔離することのみを目指してはいない。境界線を設置し、その維持に奔走しながら、彼らもまた「外部」との接触を求めている。作り上げた宮殿の壮麗さを「見せつけ」ながら、見つかることを極度に恐れ、客を招待しながら、最終的には秘密を守るために殺してしまうという彼らの規則からは、隠された王国でありながら、同時に「外部」からの視線を必要とするという一見矛盾めいた傾向が共存している様子が伺える。他者を自らの方にたぐりよせることで自らの「富」を確認するという、「外部」への志向が彼らの生活を貫いている。言い換えれば、Washington 家もまた境界線を越えようとする運動に自らの存在意義を見だしているのである。

この「富」をめぐる運動はこの作品が置かれた第一次世界大戦後の経済的繁栄にのみ限定されるものではない。Braddock が George Washington の直系であると紹介されていることは、同時代の風刺であると同時に、アメリカの歴史というより広い枠においてこの作品が機能していることを示している。「アメリカ」とはそもそもの始まりからすでに「運動」であり、歴史のあるいは地理的な座標を必然的に越えていくものではないか—フィッツジェラルドが示すのはそのようなヴィジョンであり、同時にそれが作品における破滅的展開の基調音となっている。

藤田はモンタナにおける Washington 家の王国が時代から隔たっているどころか、1920年代のアメリカと多くの点で重なり合うことを指摘したが、そのことを踏まえるならば、20年代アメリカとその「外部」に位置するモンタナは、結局のところ富を求めて運動

していく「アメリカ」が実現した二つのヴァージョンにすぎないことになるだろう。すべては「アメリカ」の内部において進行することになるのである。西への運動によって、「外部」を領有していく動きが空間的限界に突き当たったとき、「アメリカ」はそれ自身へと折れ返ることになる (Hardt and Negri 173)。作品において Washington 家を襲う飛行機は、自身へと跳ね返っていく「アメリカ」の姿を浮き彫りにしている。当初「超越的」なものとして登場しているかに見える飛行機は、最終的には「神」との乖離を露呈するといっていだろう。神の代理として正義の裁きを下すどころか、飛行機部隊は抑圧された黒人奴隷たちの住む建物を爆撃し、最後には着陸してダイヤモンドの山を目指す。彼らもまた、富を獲得する競争に参加する人間にすぎないことを、この物語は皮肉を込めて描き出しているといえるだろう。アメリカの「外部」に作られた不正義の王国に神が裁きを下す、という舞台は、最終的にはアメリカ人同士が富をめぐる争う場として提示されるのである。その一方で、神はその存在を Unger に暗示しながらも介入することはない。

建国からモンタナの王国へという空間的・時間的な推移の果てに提示されるのは、「アメリカ」という運動がその内部において自身に振り返った時に生じる破滅的帰結である。常に非アメリカ的な「外部」をその内に取り込んでいく運動が、「外部」を見失ったとき、非アメリカ／アメリカという図式はアメリカ／アメリカという自己の内部での抗争へと姿を変え、自壊へと向かうのではないか、という恐怖が示されているといえるだろう。

フィッツジェラルドはこの悪循環ともいえる運動からの出口として Unger と Kismine のロマンスを用意している。運動の果てに富への欲求が自己崩壊した時、すなわち「アメリカ」がその運動を止めるところになお残るものとしてのロマンスを提示することによ

て、すべてを失った二人がこの先「アメリカ」とは異なるような共同性を築く可能性を開いておくことによって、ある種の救済を与えているといえるだろう。「アメリカ」が歴史を越えて作動し続けるとしても、そこから一種の“clean break”が確保されるような瞬間を作品は垣間見せようとしている。

### 3

さまざまなシステムを接触させていく運動としての「アメリカ」は、フォークナーによる“Red Leaves”においてさらに深みを獲得しているといえる。白人・先住民・奴隷といった複数の共同体を近づけ、接触させ、それを飲み込む運動が作品においても提示されている。さらに、その接触が思いがけず生み出す反-共同体的な存在を登場させている点においてフォークナー作品は際立っている。

この作品においては、間接的に言及されるにすぎない「白人」が先住民共同体に影を落とし始めている様子が示される。殉死の儀式から逃亡を図る奴隷が身につけているダンガリー布のズボンが、白人から先住民が買ったものであるという事実はこの文脈において重要性を帯びてくる。一つの商品が経ることになる移動は、そもそも関わりを持たなかった三つの共同体をつなぐ糸となって奴隷の「現在」をとらえているのである。逃亡先も見いだせず、財産も一切持たず、ただ逃げる者としてのみ存在する奴隷は、自らの生以外の何ものも保持してはいない。さらに、井出が指摘するように、先住民の価値観において彼は主人に殉じねばならず、その観点から彼は「すでに死んでいる」のである。しかし、23年間彼の生活を支配してきた共同体にとってはもはや死んでいるにもかかわらず、それに対抗するかのようにせり出してくる「生」を描き出している点において、“Red Leaves”は単なる文化的アイデンティティのせめぎ合いを越えた視点を開示している。



ここで出現する奴隷の「生」とは「個人」というよりは「特異性」と呼ばれるほうがふさわしいだろう。井出が強力に指摘したように、先住民と黒人たちという二つの共同体が触れ合ったとき、その「間」において、アイデンティティのすべてをはぎ取られた存在が生じているのであり、それは他者と共有されることはない。“It's that I do not wish to die” (124) と彼は二度自らに繰り返す。その生への志向は「欲望」と呼ばれる。奴隷が見いだすこの欲望は、死がはまだ生にあって彼を追い越した時に出現する、共同体から限りなく遠ざかるミクロな運動である。あたかも大気のように作品を浸す「白人的」な存在のあり方—典型的な「アメリカ人」—とは異なり、奴隷がすべてを失い、沼地において蟻を食べながら見いだす特異な存在が刻み込まれているのである。

このように提示される「特異性」を「アメリカ」という問題に接続するなら、フォークナー作品はその深い射程を明らかにするだろう。「国民」などの帰属的アイデンティティを基礎とせず、ただそれぞれの生がそのものとして存在するような「特異性」によってのみ成り立つ共同体—この共同体は国家とは明らかに相容れないものである (Agamben 87)。「白人」「インディアン」「黒人」という個々アイデンティティの間隙に生じてくる奴隷の「生」が要求するのは、共有された属性や物語に基づく共同体ではなく、いかなる「帰属」をも拒み、移動を続ける者たちが構成する集合性である (Deleuze 85-87)。これを「アメリカ」と呼ぶならば、それは単なる多元主義や内なる他者といった枠を拒絶し、いかなる共同体からも異なった次元において出現するものであるといえるだろう。

彼は最後には先住民たちの追跡によって捕らえられる。最後に彼を待ち受けているのは共同体の法による死の運命であり、彼が見いだした「生」は先住民の秩序へと完全に回収

されていく。奴隷は地理的に遠く旅することはなく、時間的にもわずかな間自らの死を先延ばしているにすぎない。それでも、その短い逃亡の範囲において、彼はいかなる共同体からも遠くにある「特異性」を自己に発見している。首長の死に始まり、奴隷の死をもって完結する共同体の儀式は、「白人」「先住民」「黒人奴隷」というシステムがせめぎあう場において突然変異のように出現する特異性が要求する「アメリカ」の姿をとらえているといえるだろう。

#### 4

ヘミングウェイの語り手は、禁酒法時代のアメリカに批判的な姿勢をとりながら、それとは違う次元において彼にまわり続ける「アメリカ」と対峙する。フィッツジェラルドにおいては、第一次大戦後の繁栄を享受するアメリカにおいて、登場人物たちをとらえ、前進させてやまない欲望が「アメリカ」として、最終的には悲劇へと突き進むものとして描かれている。フォークナーにおいては、19世紀後半から20世紀前半にかけて様々な共同体を接触させていく運動は、その一方で共同体という概念からどこまでも遠ざかっていくような「アメリカ」を極小の形で提示している。それぞれの作品が共同体の間隙において「彼方」として提示する「アメリカ」という問題はいまだに色あせていないといえるだろう。グローバル化という「われわれの現在」において、世界中に偏在する「間」からどのような「アメリカ」が見いだされることになるのか—「アメリカとは何か」という今回のワークショップが提起するのはこの上なくアクチュアルな問いである。

#### 参考文献

- Agamben, Giorgio. *The Coming Community*. 1990. Trans. Michael Hardt. Minneapolis: U of Minnesota P, 1993.

- Deleuze, Gilles. *Essays Critical and Clinical*. 1993. Trans. Daniel W. Smith and Michael A. Greco. Minneapolis: U of Minnesota P, 1997.
- Faulkner, William. *Selected Short Stories Of William Faulkner*. 1962. New York: Random House, 1993.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Stories of F. Scott Fitzgerald*. New York: Scribner, 1951.
- 一. 『フィッツジェラルド短編集』野崎孝訳. 東京: 新潮社, 1990.
- Hardt, Michael and Antonio Negri. *Empire*. Cambridge: Oxford UP, 2000.
- Hemingway, Ernest. *The First Forty-Nine Stories*. 1944. London: Random House, 1993.

## VI. 民族的少数派の描かれ方に見る 1920年代のアメリカ

(本荘忠大)

William Faulkner, F. Scott Fitzgerald, Ernest Hemingway がそれぞれ作り上げた文学についての3名の報告者による議論は、歴史的コンテクストを踏まえた上で文学テクストを詳細に分析する作業を通じて1920年代当時のアメリカ人が抱いていた国家意識、あるいは共同体という集団に対する意識がどのようなものだったかを浮き彫りにすることに成功したといえるだろう。それは同時にさらなる議論の展開の可能性を秘めたものでもあった。

中野辰彦の議論は、表向きはアメリカの道徳を守るべく制定された禁酒法と異人種がアメリカ社会を支配するかもしれないという不安や恐怖から外来の価値観を一切排除するネイティヴィズムとの関連性を指摘し、Hemingwayの短編小説“Wine of Wyoming”(1933)におけるFontan夫妻, André, 語り手「私」のアメリカとの関係に見る差異を検証し、アメリカ人の定義がいかに関係が曖昧か、その多義性を考察するものである。Fontan夫妻のアメリカ社会への同化の拒絶は、彼らの悲観的な将

来につながり、禁酒法を敷いたアメリカの負の面を浮き彫りにするが、一方で息子 André は両親とは違ってアメリカ社会へ同化していく過程にあり、彼らと親交がある語り手はFontan夫妻に共感を抱きつつも、カトリック教徒を異質な外部者とみなすように、アメリカ人として距離を置いて彼らを冷静に見つめてもいる。それぞれが「アメリカ人」であることについては三者三様であることが例証されているが、作者Hemingwayの伝記的背景を考慮に入れたとき、語り手には作者の自伝的要素が色濃く反映されているとも考えられる。そして語り手の背後には、アメリカ人として曖昧な意識を抱くHemingway自身の姿が浮かび上がってくる。

一方、藤田大憲は、第一次世界大戦後にウォール街が国際的な経済の中心地となり、未曾有の経済的繁栄を誇るようになった1920年代のアメリカという時代背景からFitzgeraldの短編小説“The Diamond as Big as the Ritz”(1922)について分析している。そして物語内に見出されるWashington家の経済的繁栄と「見つかること」への不安が表裏一体の関係にあり、それが20年代の繁栄に酔いしれるアメリカ人自身の潜在的な恐怖となっていることを読み取り、その背後にいるFitzgeraldのアメリカ観を探求している。ここで提示されているWashington家の繁栄とそれが不正な行為によって支えられている状態を神に正されること、つまり「見つかること」への不安が、そのまま20年代のアメリカの繁栄とそれに対する人々の不安や恐怖を象徴するものである点については、ワークショップの作品選定の段階で候補に挙がった同じくFitzgeraldの短編小説“The Swimmers”(1929)にも同様に見られる。

Charles Wieseは、金銭の効力を発揮させてHenry Clay Marstonの2人の子供たちの親権を奪い取ろうとし、“Well, money is power. [...] Money made this country, built

its great and glorious cities, created its industries, covered it with an iron network of railroads.” (204-205) と話す。しかしその途端に舟のエンジンが停止し、舟とともに沖に流されていくことに恐怖心を抱いた彼は、敵である Marston に救出を求め、いとも簡単に親権を放棄してしまう。当時のアメリカにおいて、このような「金は力である」とする考えを無効にする描かれ方がなされた背景には、やはり “The Diamond as Big as the Ritz” において藤田氏が指摘するアメリカの20年代の経済的繁栄とそれを神によって正されることに対する人々の不安、恐怖を読み取ることができるだろう。

また、井出達郎は、Faulkner の短編小説 “Red Leaves” (1930) におけるアメリカ先住民と「黒人」という二つの共同体の描かれ方に焦点を当てて、アメリカという普遍的なアイデンティティに回収される一方で、あらゆるアイデンティティからも逃れて行こうとする個人に対する志向をその中に共存させていた20世紀の新しい国家意識を読み取っている。ちなみに作品中に描かれる「黒人」は奴隷であり、商品であるという価値観への変遷は、作品が執筆されていた1920年代において起こっていた現象ではない。アメリカ南部に生存していた先住民を例に挙げるならば、18世紀末までに白人社会と接触することによって引き起こされた社会文化的な変化の様子を背景にしていると考えられる。しかし、そのような先住民の共同体が描かれる際にも、作品は20世紀のアメリカ社会に広がりつつあった新しい国家意識の影響を受けている。そこには当時のアメリカ人が抱く国家意識を共有していた Faulkner 自身の姿勢をも読み取ることができるだろう。

ここまで見てきた3名の報告者が議論の対象としてきた短編においては、フロアの方からご意見があったとおり、図らずも WASP 以外の人種が作品において前景化される、あ

るいは後景に追いやられながらも重要な役割を果たしている。彼らの描かれ方は人種に対する考え方を巡る歴史的なコンテキストを踏まえた際、さらに興味深い作品解釈へと結びついていく。

“Wine of Wyoming” はフランス系移民が中心的人物として登場するが、イタリア系移民やポーランド系移民にも触れられている。このような1880年以降にアメリカに大量に流入した「新移民」は、WASP 文化への非適応性ゆえに社会に悪影響を及ぼす劣等人種であると認識されていた。当時第一線で活躍していた優生学者と親交のあった Madison Grant は、著書 *The Passing of the Great Race* (1916) の中で、アメリカの民主主義や博愛主義が劣った遺伝形質を持つ人種の数を増加させ、それは WASP にとって黒死病や天然痘以上の打撃をもたらすであろうと指摘し (43-46)、社会に幅広く不安や恐怖を煽り立てた。また Lothrop Stoddard は *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy* (1920) において、社会ダーウィニズムを下敷きにして、北欧・西欧からの先住民が、南欧・東欧からやってくる劣等人種に飲み込まれないようにと警鐘を鳴らした (165)。ちなみに Stoddard の本は *The Great Gatsby* (1925) において Tom Buchanan が Nick Carraway に薦めている本 *The Rise of the Coloured Empires* のモデルとなった本でもある (Michaels 23)。このようにアメリカの20年代は、優生学を始めとする疑似科学が大きな影響力を及ぼすようになり、WASP が人種的他者の支配、抑圧、否定、排除によって自民族の優位性を確認しようとしてやっきになっていた時期である。

“Wine of Wyoming” において、Fontan 夫人はパーティーに出かけた Clear Creek で出会ったイタリア系移民について、周縁に追いやられるべき望ましくない人種であると判断している (345)。また彼女はポーランド系

移民に関して、同じカトリックであってもポーランド風カトリックであり、汚らしく犯罪を犯す性質を持っていると断言する(347)。このように Fontan 夫人は「旧移民」として「新移民」に対する優位の正当性を確信したいという WASP と同様の集団的価値観を持っていることがわかる。そもそも彼女が反対する禁酒法と「新移民」を劣等な人種的他者としてみなす考え方は、ネィティヴィズムという文脈から眺めるとき、同一線上に位置するものである。それゆえ、ここに Fontan 夫人のアメリカとの矛盾する曖昧な関係性を読み取ることもできるだろう。それは当時、「新移民」のアメリカ社会への同化は不可能とみなされていた時期であっただけに、自身のアメリカ化には反発しながらも、アングロ・サクソン系文化中心のアメリカという共同体の価値観に飲み込まれようとしている Fontan 夫人の一義的ではない揺れ動く意識へとつながるものであり、20年代において自分とは何者かと問い続ける移民の意識を象徴するものでもあるといえる。

また“The Diamond as Big as the Ritz”においては、奴隷制度が廃止されるという時間的な流れから遮蔽された世界で、奴隷制度が維持されていることを「黒人」に認識させ、その制度を持続させること自体に、白人・「黒人」間における主従関係の維持に対する白人側の欲求を読み込むことができるだろう。またそれは WASP が自民族の優位性を保持するために、被支配者の側に立つ「黒人」が想起させる人種上の恐怖を隠蔽しようとしたものとしても読めるだろう。というのも、20年代当時の WASP が抱いていた不安は、「黒人」ボクサーである Jack Johnson を巡るエピソードから典型的に読み取れるからである。

1910年7月4日、Johnson が元チャンピオンの白人ボクサー Jim Jeffries を倒して、世界史上初の「黒人」ヘビー級チャンピオンになったため、アメリカ社会では大騒ぎとなっ

た。そもそも1905年に引退していた Jeffries が再びリングに上がった背景には、当時チャンピオンだった白人ボクサーの Tommy Burns が1908年に Johnson との闘いに敗れたため、アングロ・サクソン人の男らしさを擁護し、突然姿を現した「黒人」を打ち負かすことで文明を救済してほしいという当時の白人たちによる強い要請があったという。その Jeffries が Johnson に敗北を喫したのである。当然、多くの白人による反発が引き起こされたが、この「黒人」が最も強い男としての世界チャンピオンになるという否定しようのない事実は、当時の白人<sup>(1)</sup>にとっての屈辱以外の何ものでもなかった。大人であってもアングロ・サクソン人の子供と同等の知能しかもたない人種であるさえ認識されていた「黒人」は、彼らよりも優位に立つ白人によって倒されなくてはならない存在だったのである。

このような考え方は20年代においても変わっておらず、物語内で継続されている奴隷制には、白人対「黒人」という人種上の支配・被支配関係が逆転することによって引き起こされる恐怖を隠蔽するべく、「黒人」を極端な形で押さえ込もうとする白人の側による欲求を読み取ることができるのではないだろうか。しかもこのような白人にとって都合のいい欲求に基づく行為は、神によって正されるべき不正でもある。

一方“Red Leaves”は、ここまで触れてきた2つの短編とは違い、白人が一度も登場することなく、アメリカとは何かについて、アメリカ先住民や「黒人」登場人物を通して読者に訴えかけている作品である。物語内で描かれる「黒人」は奴隷であり、商品であるという価値観への変遷は、先にも触れたが、まさに白人社会に包摂されつつあったアメリカ先住民の価値意識の変化を表す様子を的確に捉えたものである。実際にアメリカ南部で奴隷制を敷いていたチェロキー族を例に挙げ

ると、彼らの間で当初は私的財産の所有や利潤追求が重要視されておらず、「黒人」奴隷に過剰な労働を強制することはなかったという。しかし白人交易商人との接触後、彼らとの物々交換以外に生存の道を探る方法がなくなってしまうと、商品との交換に鹿皮などをいっそう使用するようになる。やがて白人商人に提供する品が減少してくると、今度はそれらを補完する公益商品として着目されるようになったものが「黒人」奴隷だった。そして捕獲した植民地からの逃亡奴隷を白人側に引き渡すことで報酬を得るという状況に陥り、「黒人」奴隷を巡ってもアメリカ先住民の間に白人の価値観が浸透していくという歴史的背景が存在していたのである<sup>(2)</sup>。また物語においては、嗅覚によって「黒人」の置かれている状況を認識する力や、時間に対するゆるやかな考え方にアメリカ先住民の伝統的な生活習慣を垣間見るとしても、そこには先住民の追跡能力に対する過信、「黒人」に対するあなどりや優越意識が前景化されている。

このようなアメリカ先住民の描かれ方の背後に、白人文化には適応できず（白人と同等の存在とはなりえず）、その一方で伝統的な生活習慣を失う悲惨な先住民の姿を見つめる作者の目がある。そこには1922年に制定された「バーサム・プエブロ領地法」や24年の「インディアン市民権法」といった連邦法に対して、政府の政策を非難するアメリカ国民の感情を読み取ることができるだろうし、その一方で社会ダーウィニズムを基調とした、強者である白人の前に弱者であるアメリカ先住民は滅び行く運命にある、というアメリカ国民の意識を表象したものとしても読めるだろう<sup>(3)</sup>。また滅び行くアメリカ先住民という考え方に関連させるならば、“The Diamond as Big as the Ritz”におけるFish村の12人の住人も“like some species developed by an early whim of nature, which on second thought had abandoned them to struggle

and extermination”（78）と描かれているように、彼らが当時のアメリカ国民の意識を反映した先住民であるという説は成り立つだろう。

1920年代は世紀転換期以降の外国人に対する不信感と恐怖感が頂点に達し、移民が極端な排除の対象として認識されるネイティヴィズムがアメリカ社会に渡って幅広く浸透していた時期であり、WASP以外の人種の描かれ方はワークショップのテーマである「アメリカとは何か」を検証する際には重要な視点ともなっている。未曾有の経済的繁栄下、さまざまな手段を講じて異質なものを、「非アメリカ的なもの」を単一の共同体に同化させようとする運動が幅広く展開されていたアメリカに対する人々の意識、アメリカ人としての国民意識は、3人の作家たちが創り出した文学にそれぞれの方法で陰に陽に浮き彫りにされている。またその内容は、歴史学のみならず政治学、社会学、精神分析学などの他分野の研究成果との領域横断的な視点をも導入することによって、より豊かな議論の展開へと結びついていくだろう。

#### 注

- (1) Johnsonを巡るエピソードは、Bederman 1-5頁を参照。
- (2) 奴隷制を敷いていたチェロキー族の歴史的変遷の様子については、佐藤88-112頁を参照。
- (3) 「バーサム・プエブロ領地法」および「インディアン市民権法」という白人がアメリカ先住民から土地を奪う契機ともなった二つの連邦法と1920年代の世論については、岩崎佳孝が20年代の西部劇を例に挙げ興味深い分析を行っている。

#### 引用文献

- Bederman, Gail. *Manliness & Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*. Chicago: U of Chicago P, 1995.
- Fitzgerald, F. Scott. “The Diamond as Big as the Ritz.” 1922. *Babylon Revisited and*



*Other Stories*. New York: Charles Scribner's Sons, 1960. 75-113.

- 一. "The Swimmers." 1929. *Bits of Paradise: 21 Uncollected Stories by F. Scott and Zelda Fitzgerald*. London: Bodley Head, 1973. 187-210.

Grant, Madison. *The Passing of the Great Race or The Racial Basis of European History*. New York: Scribner's, 1916.

Hemingway, Ernest. "Wine of Wyoming." 1933. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. New York: Simon & Schuster, 1987. 342-54.

岩崎佳孝「二〇年代の西部劇—滅び行くインディアン」『アメリカ1920年代—ローリング・トウェンティーズの光と影』英米文化学会(編), 君塚淳一(監修)(金星堂, 2004) 180-93頁。

Michaels, Walter Benn. *Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism*. Durham: Duke UP, 1995.

佐藤円「インディアンと『人種』イデオロギー—チェロキー族の黒人奴隷制を事例に—」『アメリカニズムと「人種」』川島正樹編(名古屋大学出版会, 2005) 88-112頁。

Stoddard, Lothrop. *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy*. New York: Blue Ribbon, 1920.

## V. 補遺——ワークショップにおける質問に対する回答と議論に対する発表者のコメント

(藤田, 井出, 中野)

### 1. 藤田

(質問に対する回答)

1. "The Diamond As Big As the Ritz" において, 主人公と Kismine とのラブロマンスはどのように機能しているのか。

→うまく答えられず。

2. Fish という村の名前およびその村の12人の住民とは何を意味するのか。

→キリスト教的な考えでは, Fish はキリストを指す。また, 12人という人数は12使徒をイメージさせる。主人公の John は, Hades (地獄) という出身地から, Fish

(キリスト) 村の Washington 家へ行く。このことには意味があるだろう。

(コメント)

- ラブロマンスや主人公の視点など, Washington 家以外の登場人物についての考察が足りなかったと反省しています。特に飛行機については, 地上と地続きの場所から飛び立っているという井出さんの意見や, 神の存在についての藤井さんの考察など, まだまだ考えなければならない問題が多いと思います。
- ラブロマンスについてですが, 後ほど(食事中にいろいろな先生とお話する中で), Fitzgerald がその豪勢な生活のために書き飛ばした他の多くの短編のように, 話の内容を「ハッピー・エンドの物語」とするための機能もあるのではないかと、ということを思いました。

### 2. 井出

(質問に対する回答)

質問:

- ①黒人奴隷が自分の中に見出していく「個人」と, ヘミングウェイの "Wine of Wyoming" のアンドレ(移民の息子)が獲得していく「個人」との間に違いはあるか。
- ② "An Odor of Verbena" において, ロマンズの要素はどのように機能しているか。
- ③19世紀から20世紀にかけての国家意識の変容において, マイノリティの意識や自己アイデンティティはどのように変化したのか。
- ④アメリカの個人主義において, そもそも「個人」を志向していたのは誰か。
- ⑤作者であるフォークナー自身は, 発表で論じられた国家意識の問題について, 実際に意識して作品を書いているのか。
- ⑥初代ドゥームと二代目イセティブハの時代に見られる混血は, チカソー・インディアンの共同体においてどのように機能しているか。

- ⑦「黒人を奴隷として所有する」「黒人の肉を食べる」といった習慣を、チカソー・インディアンは実際に持っていたのか。
- ⑧逃亡奴隷が蛇に噛まれるときに発する“Olé Grandfather”という言葉はどのような意味か。

回答：

- ①ヘミングウェイが描く「個人」は、テレビや映画が提出するイメージをもとに、自分自身を作り変えていくという点において、セルフ＝メイド・マンとして特徴づけることができる。一方フォークナーが描く「個人」は、あらゆる共同体、あらゆるアイデンティティからも逸脱していくという点において、セルフ＝メイド・マンとは正反対に、「作られてあった」自己をすべて剥ぎ取ったあとにはじめて見出されるような個人である。
- ②ロマンスは、共同体を維持していくいわば装置として描かれている。ベイヤードは、義母ドルシーラから、殺された父の復讐をするようにとピストルを与えられる。このとき、もし彼がその通りに復讐を遂げたのであれば、ドルシーラとベイヤードの間にロマンスが完成し、同時に彼が文字通りの「父」の位置を占めることになり、共同体がそのまま保たれることになる。その意味で、復讐が達成されず、ロマンスも失敗するこの作品は、「共同体やアイデンティティを逸脱していく個人」という“Red Leaves”に通じる主題を提出している。
- ③それまでの「アメリカ人ではない」という否定的に固定された自己アイデンティティが、「アメリカ人になることができる」という流動的なものによっていったと考えられる（ちなみに、公民権運動の高まる50年代から60年代になると、それは「アメリカ人ではなく〇〇人である」という肯定的に固定されたものによっていくと考えられる）。
- ④個人主義が「アメリカのアダム」という考えと結びついていたことを考えれば、白人男性という「アダム」だけに限定されていたと考えられる。女性（「イヴ」）やマイノリティはそこに含まれない。
- ⑤意識していたものと思われる。モケタッベの赤い靴が白人文化のものであること、「白人と同じにしなければならない」という言葉の繰り返し、奴隷貿易に関する言及など、間接的な形で白人の存在がかなり前景化されており、「普遍化」したアメリカという時空間への意識が見られる。その一方、逃亡奴隷の無名性、「彼自身（himself）」という言葉の繰り返しなど、「普遍化」に対照される「個人」への志向も意識的に強く打ち出されている。
- ⑥共同体を活性化させるものとして機能おり、そのアイデンティティを破壊するものとしては機能していない。ドゥームとイセティベハの時代は、大掛かりな移動が多く、女性や品物が共同体の「外」から「内」へともたらされ、人種的にも文化的にも「混血」の状態が進む。しかし、当時の黒人奴隷の扱い方に見るように、一旦「内」に入ったものは、「内」の価値観によって規定されている。彼らの共同体の価値観それ自体が変化するには描かれていない。それはまた、当時の彼ら共同体が、「混血が共同体を破壊する」という「アメリカ」の価値観に浸されていない証左ともなっている。
- ⑦持っていたとされている。参考文献として、*History of the Choctaw, Chickasaw and Natchez Indian*. 1899. Norman: U of Oklahoma P, 1999.がある。
- ⑧インディアン言葉で、自然への畏敬を表した慣用的な表現。Litz, A. Walton, ed. *Major American Short Stories*. 3<sup>rd</sup> Edition. New York: Oxford UP, 1994.に所収の“Red Leaves”の注釈（P.458）に詳しい説明がある。

### 3. 中野

(質問に対する回答)

- ①本番で本荘先生から質問を受けました。語り手の禁酒法への批判があからさまに描かれているにもかかわらず、私が「語り手は禁酒法に反対しきれないでいる」と言っているのはなぜかという質問です。私はこの質問に対し、彼は大量の移民の混入を危惧し、「ノー」という一言によって白人の優位を断言しようとしており、また、彼が酒を飲まないという禁酒法を遵守する立場で物語が終わっているということを証拠として挙げました。
- ②本番で、黒人奴隷のアイデンティティを捨てていくという個人主義に対して、アンドレの個人主義はどのような性質かという議論が展開されました。井出さんは、黒人奴隷がアイデンティティを捨てていくのに対し、アンドレは「男らしさ」などといったものを身につけていく過程にあるとおっしゃったと思います。私の考えもそれと類似しており、黒人奴隷があらゆる集団的アイデンティティから「抜け出して行く」のに対し、アンドレは「一人でも生きていける強い男」という、当時の理想の男性像としての個人主義へ「入っていく」過程にあると答えました。つまりアンドレの個人主義は、「大人の男」という集団に入るために必要なものであり、黒人奴隷の「出る」とは逆に位置する運動なのではないかと考えました。

(コメント)

1920年代という時代は、現在の多文化主義国家の形成のための、アメリカにとっての重要な転換期だったと言います。それはまだ辛うじて WASP としてのアメリカを保持することのできた時代であり、逆に言うと、「アメリカは我々だけのものだ」と言うことのできる WASP の最後のあがきの時代ともとれるのではないかと考えました。公的には増嶋を否定してサラダ・ボウルや文化多元論が受

け入れられていたと言いますが、実際の風潮としてはまだネイティヴィズムが強く根づいていたと言います。つまり、大量の移民の混入によって、「アメリカ=WASP」という図式が崩れかかっている正にその瞬間だったと言えるのです。そのような歴史的コンテキストを考慮に入れた場合、“Wine of Wyoming”というテキストは、様々な角度から当時のアメリカを見ることを可能にします。カトリック、プロテスタント、移民1世、2世、国籍離脱者、アメリカ人、フランス人などの視点がそれです。この作品は当時のアメリカ社会の孕んでいた複雑さを、交友のスケッチの深層に潜ませているように思えました（もしくは著者がそれをそのまま反映していたか）。そういった意味で、この作品は1920年代のアメリカを知るための貴重なテキストであると言えるのではないかと考えました。

[Abstract]

What Is America?:  
Views from the Lost Generation

Tetsuo UENISHI  
Daiken FUJITA  
Tatsuro IDE  
Tatsuhiko NAKANO  
Hikaru FUJII  
Tadahiro HONJYO

American culture and literature have characteristically continued to ask the question, "what is America?" This is the case especially from the latter half of the 19th to the early 20th century when America's ethnic demography drastically changed due to a tidal wave of immigration. Such self-consciousness of the nation peaked in the 1920s when regulations against immigration were introduced one after another and white nativism prevailed as the Ku Klux Klan gained popularity. What did the young writers called the Lost Generation, F. Scott Fitzgerald, Ernest Hemingway, and William Faulkner, think of and express about this theme? The present essay is a collaboration of six members who prepared for and held a workshop under this theme sponsored by the Hokkaido Branch of the American Literature Society of Japan.

---

Key Words: Lost Generation, Fitzgerald, Faulkner, Hemingway, America